

ハンセン病患者に生涯を捧げた・林富美子

REV.1 2025年8月1日

我部山民樹

1. はじめに

林富美子（大西）は、香川県琴平町で生を受け、丸亀高等女学校に進学し、東京女子医学専門学校を経て医師となり、ハンセン病（癩*1）とハンセン病に対する社会の偏見・迫害・差別（*2.）に苦しんでいるハンセン病患者に生涯を捧げた。

癩者（ハンセン病患者）は聖書にも出て来るし、奈良時代、光明皇后が癩者の膿を吸った話、戦国武将大谷刑部も癩者だったとの逸話がある。癩は慢性伝染病で、傷口や鼻粘膜からうつるという。感染しても潜伏期間が長く病状がなかなかでないため、長い間伝染性とみられていなかった。遺伝性の病、家系病とされてきた。それ故に癩者を持つ家では癩者を納屋に匿って面倒を見るとか、癩者はそうした家族の苦慮を思って放浪に旅に出るとか、命の果てるのを待つのみで巡礼に出るといった状態であった。重病の癩者は眉や髪の毛が脱落し、結節でてらてらに盛り上がった顔、潰傷の膿で黄色く変色した繃帯で手足を包んだりしていた。そして利かなくなってきた足を引きずって物乞いする癩者の姿や、神社や寺の縁に憩う癩者の姿があった。1873年にハンセンが癩菌を発見し、癩病は慢性の感染症と認識されたにも関わらず、日本では感染症との認識は行き届いていなかったため相変わらず家系病と信じられていた。そうしたことから1930年代頃までは癩者の姿が街々で見かけられた。そして富美子が小学校就学前（1912～1913年頃）に祖母に連れられて行った善通寺というお寺（善通寺市内にある）で重症の癩者たちの姿を見ることになった。幼い富美子はその光景を目におさめ記憶の中から追い出そうともせずいつまでも記憶にとどめていたのには驚いてしまう。その年齢の私ならきっと目を背けたに違いない。もし仮に目にしたとしても悲し過ぎる思いを記憶の中から消し去ってしまったであろう。富美子はそのことが医師となりハンセン病患者に寄り添うきっかけになったとは回想録に書いていないが、回想録に書き留めているのは、何らかの思いが残り続けたからなのだろうか。

富美子は東京女子医専在学時に自らの意志でキリスト教の洗礼を受けており、神の教えが原動力となり、夏の休暇に全国キリスト教青年会に参加し、その日課のひとつとして御殿場市にある日本最古の癩病院・復生病院を訪問したことをきっかけにハンセン病患者の病気治癒だけではなく精神的に寄り添う救癩事業（*3）に生涯を捧げる決心をしたようだ。

富美子は、病友にすすめられ、1981年、74歳のときに救癩事業のかげに咲いた愛の群像とその回想録『野に咲くベロニカ』（*4）を著した。その一部を抜粋し、富美子の生きざまを紹介したい。

富美子が『野に咲くベロニカ』を著した1981年頃、日本ではもうこの病気に罹患する人はきわめて稀になり、少年期の発病はここ十年近くも前からゼロとなっていた。この陰には「自分も関わってきた日本近代の救癩事業という輝かしい不滅の歴史が隠されていることを誰も忘れることはできない」ことだとその著書の中で自負している。

そして救癩事業の実情と「救癩の父」と言われた光田健輔院長を主軸としたキリストの愛に燃える医療団の活躍と同志達の名前を記録し、且つ自分の心のメモリアルにしたいと思って、『野に咲くベロニカ』を著した。

単なる推測だが、政府が救癩より強制的に患者を隔離することにより社会防衛をするということに主体が置かれていたことが一般に知られるようになり、富美子が尊敬する光田健輔が隔離収容政策に深く関わっていたということがクローズアップされ始めたことで、純粋に救癩事業のみに生涯を捧げてきた富美子の忸怩たる思いが背中を押したのではなかろうか。

池田光穂氏は言う「癩の国家的撲滅という理念の成就に賭ける情熱という〈純粋〉さと、悲惨な人々への慈悲の深さという〈純粋さ〉で救癩事業に生涯を捧げたのであろうが、日本政府のハンセン病対策が法的な社会制度としても、医療制度としても、患者の隔離を通して社会を守るという社会防衛に主力がおかれ、病者の人権が軽視されてきたことを現在の私達は知っている。そしてこの過失に対する国家賠償責任履行の不十分さや管理当事者たちの責任回避、さらにはハンセン病患者の文字通りの社会復帰の現状が未だ不十分であることも知っている」と。

*1. ハンセン病

日本財団資料によると

「ハンセン病は、「らい菌（*Mycobacterium leprae*）」が主に皮膚と神経を犯す慢性の感染症ですが、治療法が確立された現代では完治する病気です。1873年にらい菌を発見したノルウェーのアルマウエル・ハンセン医師の名前をとり、ハンセン病と呼ばれるようになりました。らい菌の増殖速度は非常に遅く、潜伏期間は約5年ですが、20年もかかって症状が進む場合もあります。最初の兆候は皮膚にできる斑点で、患部の感覚喪失を伴います。感染経路はまだはっきりとはわかっておらず、治療を受けていない患者との頻繁な接触により、鼻や口からの飛沫を介し感染するものと考えられていますが、ハンセン病の感染力は弱く、ほとんどの人は**自然の免疫**があります。そのためハンセン病は、“最も感染力の弱い感染症”とも言われています。初期症状は皮膚に現れる白または赤・赤褐色の斑紋です。痛くも痒く

もなく、触っても感覚の無いのが特徴です。現代では特効薬も開発されており完治する病気です。治療をせずに放置すると身体の変形を引き起こし障害が残る恐れもありますが、初期に治療を開始すれば障害も全く残りません。」

*2. ハンセン病と差別

日本財団資料によると

ハンセン病に罹患した人びとは遠く離れた島や、隔離された施設へ追いやられ、自由を奪われ「leper」という差別的な呼ばれ方で、社会から疎外された状態で生涯を過ごすことを余儀なくされました。

ハンセン病はもはや完治する病気であり、ハンセン病回復者や治療中の患者さえからも感染する可能性は皆無です。それにもかかわらず、社会の無知、誤解、無関心、または根拠のない恐れから、何千万人もの回復者およびその家族までもが、ハンセン病に対する偏見に今なお苦しんでおり、こうした状況を是正する社会の取り組みは遅れをとっています。あらゆる時代、あらゆる場所で、国、地域社会、学校、企業、病院、あるいは宗教団体も含めた組織がハンセン病患者とその家族に対して行ってきたことは、まさに重大な人権侵害であり、彼らの尊厳を傷つけてきました。生涯にわたる強制隔離、社会サービスの制限、労働市場における差別は、ハンセン病患者に対する人権侵害のほんの一部にすぎません。教育、結婚、あるいは住む場所を見つけることにすら、かれらの前には壁が立ちはだかっています。

また、世界保健機構 WHO によりハンセン病は「顧みられない熱帯病 (NTDs)」に指定されている。日本の新規患者数は年間で 0 - 1 人に抑制され、現在では極めて稀な疾病となっています。

*3. 救癩事業の実情

富美子の著書によると

長島愛生園の病友（患者）の中には、激しい神経痛に悩まされたり、高熱を出す癩特有の病気に苦しむ者もいた。一番痛々しいのは、癩性眼病のために、その人の人格までが変わってしまう事である。苦痛の無い者には医者や看護婦の必要がなく、私の周辺に集まる者は、みんなの嫌われ者の偏屈者、長い病気と放浪の末、世間の迫害に歪められた変質者が多かった。医局ゴロと人は呼んでいたが、この人達の顔も名前も、そして私に向かって言った言葉もよく覚えている。そして、私の長島での日々において、この人達を除いては私の生活は無かったとも言える。

その当時、島には教会堂などというものはなかった。私達は日曜日になると、晴れた日には浜辺の小石の上で輪を作り、また水源地のある山の上で礼拝をした。官舎の小さい応接間で膝をつき合わせて、祈り、讃美歌を歌った若者達の熱い情熱が、気の毒な癩者を背負う原

動力となっていた。『砂に座し 砂をつつきて ひとつごと 思いわびつつ 幾時か経し』と年若い癩者は歌っている。私達は少年舎や少女舎の子供が気にかかり、夜になってまた病舎地区を尋ねることもあった。『月よみの 光を恋いて 師の君は 山のけわしき 路越えて来ませし』血を分かちあう血縁のように、職員と病友が一つに溶け合っていた時代であった。また病友達を慰めるためには、俳句会、短歌会はもとより、野球、芝居など島をあげての騒ぎであった。

宮川量先生が谷々に果樹園を造り、病舎を桜樹でもって覆うほどに植林した。花壇に花の絶えることがなかった。

*4. 『野に咲くベロニカ』の題名の由来

(復生病院のある) 御殿場、きびしい冬のおわりに、ベロニカという空色の星のように小さい花をよく見かける。和名では「いぬふぐり」と言うが、復活祭(2025年には4月20日に行われた)を控えた頃枯芝の中で、はえつくばるように咲く花は、ベロニカと呼ぶほうがふさわしいように思えてならない。



P・ベルトの『キリスト伝』によると、ベロニカという婦人がいて、キリストがゴルゴダの丘にひかれて行くあおの坂道で、いたましく変わり果てた御顔の血と汗を、かけ寄って拭って差し上げた女性として描かれている。そのかぶり布を家にもどって広げたら、そこには、はっきりとキリストの御顔が写り出されていたというのである。…中略。御主キリストの御顔の汗をぬぐい奉ることはたとえ出来なくても、苦悩の間で嗚咽する癩の病友のために働いた、数多くの看護婦達もまた、ベロニカに外ならないと思えるのである。

・死を目前にした病友が、季節外れの西瓜を欲しがるので、多摩全生園の作田ツネ看護婦が自分のポケットマネーで新宿まで買いに出かけた。帰ってみたら、その病友はすでに亡くなっていた。彼女は西瓜を病室の床において、泣き崩れたというが、このベロニカの咲く頃に、いつも思い出される人である。

・昭和十年、離島の病友を乗せた輸送船が、七島灘の荒れ狂う波に翻弄されて、長い航海となった時、船のマストに自分の身体をロープでつなぎつけて、波しぶきの中を、病友の糞尿を海に投げ捨てながら、鹿児島港に無事に病友を連れ戻った、あの勇敢な前田婦長もまた

あのゴルゴダのベロニカの勇気に似ていると思うのである。

・明石癩院が閉鎖されたとき、明石病院を背負ってこられた偉大な大野女史が多くの青少年を母のようにかばいながら愛生園に移住してきたが、ここでは、はいつくばるように汚れものを洗濯しているのである。あの美しい大野悦子女史のお顔が、ベロニカという女性と重なり合って思い出されてならない。

・今年も駿河国立病院内の復活祭に参加したが、聖堂の一隅に、数名の癩女がひとかたまりになっていた。そのあたりからひととき美しい、祈りと賛美の声が聞こえてくるので気づいたのである。白いベールに覆われた癩女達の顔は定かではなかったが、私はひどく心を打たれて絶え間なく涙が伝わり落ちて来るのをどうすることもできなかった。ここにもベロニカはいたのである。イエス・キリストの御顔の痛みは、彼女達の祈りと賛美でどんなに和らげられたことであろうか……。

現代、世界人類の神への忘恩の罪は、償うべくもないが、こうして、病める彼女達の祈りの声を聞いていると、これこそ、忘恩の罪を償う声であると思えたのである。ベロニカはここにもいたのである。

2. 主な登場人物

氏名	略歴および人物像
林富美子 (大西)	<p>香川県琴平町で大西幸太郎とえんとの間に生まれる。9人兄弟で富美子は4番目である。兄二人、二つ違いの姉・光子、弟四人と末子の妹。生家は300年以上続いたと思われる豪農の旧家で、使用人が少ない時にも二人いた。</p> <p>富美子は丸亀高等女学校、東京女子医大専門学校を卒業し医者となり、ハンセン病患者に生涯を捧げる。東京女子医専の時にプロテスタントのキリスト教に入信する。体格は旧制御学校の2年生位の貧弱な体だと述懐している。容姿は不明だが、父親は色白でふくよかな美男子、母親は小柄で美人だったと述懐している。両親とも美形で富美子は母親似の小柄な美人だったに違いない。</p> <p>富美子を含めて9人兄弟中の6人が丸亀高等女学校と丸亀中学校を卒業した。</p>
大西長太郎	富美子の祖父。信心深く、生け花は池坊、お茶は裏千家を嗜む。野良仕事はしなくて終日村役場に出勤。

大西お里	富美子の祖母。丸亀藩の士族の娘。三味線を嗜む。毎晩のように富美子に夜とぎ話をした。
大西幸太郎	富美子の父。色白でふくよかな美男子であったと述懐している。野良仕事はしなくて終日屋敷続きの村役場に出勤。富美子が小学生の時には村長をつとめていた。
大西えん	富美子の母。商家の娘。日本舞踊に三味線を嗜み、十七歳で裁縫の師匠になった。小柄な美人で、機敏に頭のはたらく女性で、常人（じょうびと、使用人の意味だろう）のほかに雇い入れ人の大勢を指揮し、野良仕事の先頭に立っていた。 大西家は、大正、昭和にかけてのパンニックで家と屋敷を残し、田畑も山林も人手に渡り、没落したが、母・えんの働きがなければもっと早く没落しただろうと富美子は思う。
大西幸雄	富美子の兄で大西家の長男。七里も離れた丸亀市の親類に下宿して中学に通う。八高東大建築科卒で震災後の学校建築の権威者として東京市役所で辣腕を振るった。東京都の建築課長を最後に退職する。
大西家の次男、富美子の兄	七里も離れた丸亀市の親類に下宿して中学に通う。横浜の海軍機関学校に進学。
大井光子（大西）	富美子の姉、女学校の寄宿舎でまるで母代わりように世話になる。富美子にとっては生涯母役。
大西基四夫	富美子の8歳年下の弟。丸中卒後に二校を経て東北大医学部を卒業後、富美子の止めるのも聞かずに救癩事業に携わる。多摩全生園の園長を最後に退職
尾松の伯父	父の弟で富美子の実家が没落した後、富美子2年生のときに学費を心配し、赤松の叔父に学費を出してもらおうように奔走。
赤松の叔父	父の妹の嫁ぎ先、お金持ちで造り酒屋、富美子の学費を出す。毎月45円であった。

吉岡弥生	<p>富美子が東京女子医学専門学校で学んでいたときの校長。女子医専は東洋唯一の女医学校だったので、韓国、台湾、タイ、中国と言う国々の留学生と共に机を並べて勉強することが出来た。</p> <p>東京女子医科大学の前身である東京女医学校、東京女子医学専門学校を創設し、女性医師の養成や医学の教育・研究の振興に尽力した。津田梅子（津田義塾大学創立者）、安井てつ（東京女子大学創立者）、鳩山春子（共立女子学園創立者）、跡見花蹊（跡見学園創立者）、下田歌子（実践女子学園創立者）、横井玉子（女子美術大学創立者）などと並ぶ、日本の女子教育の基盤づくりに活躍した女性教育者である。</p>
光田健輔	<p>富美子が生涯父と慕った人物。</p> <p>光田健輔（みつだ けんすけ、1876年（明治9年）1964年（昭和39年）は、日本の病理学者、皮膚科医で世界的な癩病理学者。光田を主軸としたキリストの愛に燃える医療団が組織される。生涯をハンセン病の撲滅に捧げ、国立長島愛生園初代園長等を歴任した。生前は「救癩の父」と崇められ、文化勲章やダミアン・ダットソン賞を受けた。その一方で、患者の絶対隔離政策を推進する「らい予防法」改正、無癩県運動や「らい予防法」制定の中心人物であり、日本の対ハンセン病対策の明暗を象徴する人物ともされる。</p> <p>○愛生園光田園長のエピソード</p> <p>小川正子が収容した重症の女の病友を背負って療養所に帰って来た時、光田園長が涙をこぼした。このことを、手記を読んで知った長い間司法官であった方が正子に、「救癩四十年なお病友に涙を溢すということは並大抵ではない。園長は大した人物だと思う。一つのことを十年、二十年とやっているといつかその仕事に感激を失って事務的になって来る。一つの仕事に三年従えばそれは一つの事業をしたといえる。しかし十年同じ仕事をし通したというのは腕でも才能でもない。唯その人の人格によるのだ。」と聞いたと記述している。確かに光田園長は患者に心から寄り添い、癩者の樂園たる理想の療養所づくりに燃えた(大した人物)だった。</p>
林芳信	府県立癩療養所全生病院の局長
林文雄	・富美子の夫

	<p>・1900年11月26日、画家林竹治次郎の息子として北海道札幌市に生まれる。1926年に北海道帝国大学医学部を卒業し、同年5月から全生病院に勤務。1931年2月25日、「癩に於ける皮膚反応」で北海道帝国大学医学博士。同月、長島愛生園医務課長。1935年、星塚敬愛園園長。1944年、肺結核の療養のため大島青松園に転勤。1947年7月18日、死去。全生病院（国立療養所多摩全生園）、国立療養所長島愛生園、国立療養所星塚敬愛園（園長）に勤務し、国立療養所大島青松園で、病気療養をした。特に光田健輔を助け、光田反応を完成させた。クリスチャン、ヒューマニストであり、南九州、とくに奄美、沖縄のハンセン病患者救済に取り組み、理想の療養所建設に力を注いだが、志半ばで病に倒れた。</p> <p>・父の竹治郎は生涯を教育者として過ごした熱心なクリスチャンで、自身もクリスチャン。北大医学部第1期生として学んでいる時病理の講師の藤井保から癩病院や光田健輔のことを聞き決意した。光田に就職希望を伝えるとまず外科を学べと言われ、1927年に全生病院に入った。光田の研究を継承して『らいにおける皮膚反応』を完成させ、学位を得た。1930年光田の片腕として長島愛生園の医務課長となった。1935年10月星塚敬愛園長となった。1936年3月末、光田の下、一緒に働いてきた大西富美子と結婚した。妹の百合子（女医）は光田の三男横田篤三の夫人でもあり、光田と特別な関係にあると言っていい。</p>
名和千嘉	<p>富美子と女医専の同級生で教会も同じ同信。親の猛反対で愛生園に就職できなかった。そのため1932年に富美子が愛生園に赴任することになる。しかし千嘉は（救癩の情熱は冷めやらず）1944年になって二児を抱えて愛生園に就職し、その後四十年ほどを島のために捧げた</p>
小川正子	<p>・富美子と女医専の同級生で同時期に愛生園に就職</p> <p>・山梨の甲府高等女学校を卒業した後、結婚をしたが三年後に離婚し、東京女子医学専門学校に入学し昭和4（1929）年卒業している。「癩救済事業」には在学中から関心をもっていた。医専卒業後も小川の救癩の情熱は冷めやらずハンセン病療養施設であった東京の全生病院への赴任を希望するが、光田の面接を受け、実地医学の一般研修を先に受けるように諭された。彼女は3年間、細菌学、内科、小児科の臨床経験を積んだ。しかしながら全体主義的傾向が強かった内務省管轄の施設では、救癩の施設であるにもかかわらず女性医師の任官のチャンスは少なかった。小川は、全生病院（のちの全生園）で働いていた女医の西原蕾や五十嵐正のアドバイ</p>

	<p>スに従い、岡山県の長島愛生園に「直接談判」に赴き、ようやく光田によって受け入れられた。昭和7（1932）年6月のことである。</p> <p>・岡山にある長島愛生園は彼女の卒業の翌年に設立され、1931年には光田健輔が園長に就任した。この年は、満州における日中の交戦状態に入る柳条湖事件がおこっていた。国内では「癩予防に関する件」に代わる「癩予防法」が成立した。この法律は、それまでの放浪ハンセン病患者の收容隔離から、すべてのハンセン病の隔離收容政策への変更を意味する（藤野2003）。もちろん総力戦態勢の当時、医療行政は内務省と陸軍省に管轄され、ハンセン病患者の隔離收容政策は着々と整備が続いていた。植民地朝鮮では1935年に「癩予防令」が公布施行される（滝尾2001）。その数年後の小川の姿にみられるように、地元の役場関係者と巡査らとともに、医師たちは地方の村々の患者のもとを訪れ検診をおこない、診断にもとづいて收容を決定し、法律に従って人々の移送を行っていた。（池田光輔）</p> <p>・小川は当時ベストセラーとなった『小島の春』（*5）を著作。内科を担当するかたわら、自宅に隠れ住み、病院のあることも知らず、その治療法も知らず、十年も二十年も放置されていた病友を全国各地の辺境の死地から連れ戻した検診旅日記である。（林富美子の著作より）</p>
--	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

*5. 小川正子の手記『小島の春』

○『小島の春 ある女医の手記』



小川正子らが、難所をこえ、人が集まる所では講演や映写もおこなう旅で、また相当な僻地において、小川正子が未收容の癩患者を診察する経験を記した手記である。

僻地に住む家系病とのみ信ずる人々に伝染病だ、不治ではない、ことを啓蒙し、患者たちを收容して歩くことは並大抵の仕事ではない。愛する家族を奪い取って連れて行く辛い仕事が自分の使命と覚悟していた。

○再び土佐へ（六）御国のための項目よりの抜粋

「(癩者) 十一名は身を以って祖国を潔める救癩戦線の勇ましい戦士として、新しき地に、われらの唯一の戦場であり、また楽土ある療養所に向けて出発する希望の朝だ。私達の列車も出征なのだ。誰も万歳をしてくれる者はなかった。よそながら見送ってくれる近所の人もなかったけれども、私達は十分であった、私達はみんな嬉しかった。」とある。

療養所は病友にとって由一の楽土であり、自分たちが救癩に使命感を覚え、癩者に一生を捧げることに喜びを感じている。(戦後の我々には違和感があるが) 強制的に収容することが人権蹂躪につながるという観念は微塵もなく、自分たちも大方の癩者も祖国を潔めるという意味で貢献していると喜んでおり、当時の国民には共感を得ていたようだ。(受け入れられない癩者もいたことだろう。)

正子は短歌に長けていたので、多くの短歌を手記に書き込んでいる。その一部を抜粋したので正子の心境を推し測って頂きたい。

- ・葛の花 咲き初む秋を 山峡のみち 分け分けつ 病友を尋ねる
- ・自転車上に 語りつ越えし 土佐の国の 夕月の夜を 我忘れめや
(正子は自転車をこげなかったので荷台に乗っていた)
- ・病む児持つ 父が歎きに 胸うたれ とぼとぼかへる 上山みち
- ・トラックの ふちにつかまり すすり上げ すすり上げ泣く 四十の男
- ・これやこの 夫と妻子と 一生の 別れかと想えば 我も泣かるる
- ・夫と妻が 親とその子が 生き別る 悲しき病 世に無からしめ
- ・南うけて 土佐ぬくとけど 汝を吹く 荒からむいざ 行かな病友よ
- ・岩白く 水紺青の 色に澄む 阿波の祖谷溪 いま越ゆるなり

○文化人類学者池田光穂氏の『小島の春』断章より

『小島の春』は、昭和9年(1934年)から11年「1936年」までの巡回検診記録であり、当初、長島愛生園慰安会による『愛生』という所内の雑誌(戦前のシリーズは昭和5年創刊)に掲載された。小川の結核発病により、今度は本にまとめる時間的余裕が生まれ、昭和13年の発刊になった。この書物は刊行と同時にベストセラーになる。また女優の夏川静江の主演で、豊田四郎監督作品として映画公開され、昭和15年度の『キネマ旬報』のベストテン第1位になった。小川の意識は同時に国民に共感されるようになる。

・明治35(1902)年の生まれの小川の人生は当時の医師としては極めて特異的だった。しかし、別の意味では、当時の人たちが抱く典型的な人間主義的理想像を生きた人でもあった(もちろん小説から垣間見える彼女は聖人君子よりもむしろ仕事に真摯に打ち込む「誠実な人」である)。小川は山梨の甲府高等女学校を卒業した後、結婚をしたが三年後に離婚し、東京女子医学専門学校に入学し昭和4(1929)年卒業している。「癩救済事業」には在学中から関心をもっていた。岡山にある長島愛生園は彼女の卒業の翌年に設立され、1931年には光田健輔が園長に就任した。

医専卒業後も小川の救癩の情熱は冷めやらずハンセン病療養施設であった東京の全生病院への赴任を希望するが、光田の面接を受け、実地医学の一般研修を先に受けるように諭された。彼女は3年間、細菌学、内科、小児科の臨床経験を積んだ。しかしながら全体主義的傾向が強かった内務省管轄の施設では、救癩の施設であるにもかかわらず女性医師の任官のチャンスは少なかった。小川は、全生病院（のちの全生園）で働いていた女医の西原蕾や五十嵐正のアドバイスに従い、岡山県の長島愛生園に「直接談判」に赴き、ようやく光田によって受け入れられた。昭和7（1932年）年6月のことである。

・赴任した彼女の仕事は、長島愛生園での収容者の診療の他に、その3年前に改定された癩予防法のプロトコルに従い、「祖国浄化」—収容政策は関係者の間ではこのように表現されていた—の理想に燃えて、中国四国地方の村々を定期的に巡回検診—より多く病者を発見——することであった。

・小川の作品中にみられる巡回の様子やそこで出会うさまざまなハンセン病患者との邂逅のエピソードは、今日の我々にとって共感と違和感が相半ばするものである。それは『小島の春』が「正しい」啓蒙的知識の普及を通して癩の国家的撲滅という理念の成就に賭ける情熱という〈純粹〉さと、悲惨な人々への慈悲の深さという〈純粹さ〉と、それらが放つ偽善的な〈妖しさ〉の不気味な混成物だからである。完全に純粹で真面目なものの真の恐ろしさがそこにはある。

・私たちは現在、日本政府のハンセン病対策が法的な社会制度としても、医療制度としても、患者の隔離を通して社会を守るという社会防衛に主力が おかれ、患者の人権が軽視されてきたことを知っている。そしてこの過失に対する国家賠償責任履行の不十分さや管理当事者たちの責任回避、さらにはハンセン病患者の文字通りの社会復帰の現状が未だ不十分であることも知っている。この認識は、無医村の状況を改善するために厚生省の末端機関で勉強努力していた官僚や医師やその他の保健普及員たちのみならず、無産者診療運動や医療利用組合運動に参画していったかつての左翼運動家や共鳴者たちにも抜け落ちていたものだった。彼らは同じ罫に捕らえられていた。

これらの私の判断は、現時点での価値観にもとづく過去の出来事の無慈悲な断罪である。

3. 主な出来事

年度	林富美子の出来事	世の中の出来事
1873		ハンセンがライ菌を発見し、ライ病は慢性の感染症と認識される。
1907 (明治40年)	香川県琴平在の農家の9人兄妹の4番目として生を受ける。 父；大西幸太郎, 母；えん	日本で「癩（らい）予防ニ関スル件」が制定され、療養の方法がなく屋外で生活している患者（放浪患者）を療

	生家は常人の外に、雇い入れの大勢が働いていた裕福な農家	養所に強制隔離することが定められ、不妊手術の強要が実施される
1913? (富美子が小学校に上がる少し前)	祖母に連れられ善通寺というお寺に行き、指のない腕を差し出している者、顔のくずれた人、盲目の人等の癩者の群れが座って物を乞うているのに出会う。その当時は十万人ともいわれた患者が杖を引き、鈴を鳴らして巷を彷徨っていた。	
1924 (大正13年)	丸亀高等女学校(現丸亀高等学校)を卒業、尾松の伯父の勧めで女子医学専門学校に進学 (9人兄妹の内6人が丸亀中学、丸亀高等女学校を卒業)	
1925	大正、昭和にかけてのパニックで、家と屋敷を残し、田畑も山林も人手に渡り、実家は倒産の憂きめにあう、造り酒屋の赤松の叔父が富美子の学資援助をしてくれる	
1928	6月17日、あふれるような神への思慕がわき起こり、自らの意志でプロテスタントとして洗礼を受ける	
1928 夏	御殿場で開催される全国キリスト教女子青年会(約200人の女子学生が参加)に参加、その日課で富士岡村にある日本最古の癩病院・復生病院を訪問	
1929 (昭和4年)	東京女子医学専門学校(現東京女子医大)を卒業、国立癩療養所多摩全生園への就職を希望するが、医局員の欠員がないと断られる。東大のキリスト教青年会の人達で組織する総合病院の賛育会錦糸堀病院に就職。 この進路選択により、学資を援助してくれた赤松の叔父に学資とその利子を返却することになる。	富美子の同僚・小川正子も卒業、小川正子は日本初の国立ハンセン病療養所である岡山県長島愛生園に就職して6年ほど勤務するが、結核に罹り、その後長島を離れて療養する。

1930	<ul style="list-style-type: none"> ・東京都下東村山国立癩療養所多摩全生園の医師となる、神の召し出しを受けて、使命の道に立てたと歓喜する。光田院長、林医局長、林文雄、塩沼英之介、田尻敢、宮川量、藤田工三など熱心なキリスト教徒がいた。 	
1931	<p>小豆島が真向かいにかすんで見える長島に日本で初めての国立癩療養所の「岡山県国立癩療養所愛生園」が開園する。光田先生と林文雄も赴任する。</p>	「癩予防法」を制定
1932	<p>6月、「国立癩療養所愛生園」の医師に任命される。東京女子医専の同僚の小川正子も同時に愛生園の医師に任命される。医局の陣営は林文雄医務課長、田尻敢医官、杉本徹医官であった。富美子は眼科を担当し専ら癩眼の失明と戦う。</p>	
1932	<ul style="list-style-type: none"> ・医務課長の林文雄が国際連盟の招きを受けて、世界の癩施設を見学 	
1933	<ul style="list-style-type: none"> ・富美子、愛生園に帰る ・1月、林文雄が外遊を終えて愛生園に帰る 	
1935 (昭和10年)	<ul style="list-style-type: none"> ・10月、鹿児島県鹿屋市に、第二の国立癩園の星塚敬愛園が誕生。園長には林文雄が就任することになる。 	
1936 (昭和11年)	<ul style="list-style-type: none"> ・2月、恩師光田園長より、急遽、林文雄との縁談話が持ち上がり、結婚が決定。（*6） ・小川正子先生が岡山奥地の検診が命ぜられ、富美子が特別に願って同道する。小川正子が岡山駅まで送ってくれた時、琴平までの二等切符を握らせてくれた。「二等に乗ったことが無いでしょう」と耳元でささやかれ、富美子は涙をのんだ。この時が正子の姿をみる最後となる。 	

	<p>3月31日に林文雄と結婚式を挙げる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・倉敷の結婚式場から文雄の任地である鹿児島県鹿屋市の国立星塚敬愛園までが、文雄と富美子の新婚旅行となる。 ・富美子は敬愛園事務官となり、夫・文雄を助けることになる <p>・4月11日、富美子が挙式した9日後に夫文雄によって療養所には入れない三千人の癩患者が待つ沖縄に派遣される。</p> <p>その月のうちに敬愛学園に帰るが、聴診器を捨てて、台所仕事と庭造りに専念する。第2回沖縄訪問に供えて英気をやしなうためである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二度目の沖縄訪問の日が近づいてきたが、妊娠が分かり、沖縄行きを断念する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小川正子はその後も、高知に瀬戸内海にと検診の旅を重ねた。そしてその都度、癩園も知らずに、長い年月をかえりみられることなく放置されてきた患者を、その死地から連れ戻した。光田園長より「検診日記はその都度書いておかないと気分がうすらぎ、千遍一律(ほとんどが同じ調子で面白くないこと)になってしまいますよ」と言われ、それを忠実に守った。
1937	<ul style="list-style-type: none"> ・6月11日、長女・道子が生まれる。のちに道子は町の保健センターで地域の健康造りに専念することになる。 	
1938	<ul style="list-style-type: none"> ・沖縄の屋我地島に国立愛楽園が創立される。 	<p>小川正子は結核の療養中のこの年、癩院のあることやその治療方法も知らず放置されていた病有(患者)を死地から取り戻す全国検診の旅の様子や患者と家族が生き別れる悲しさなどを著した『小島の春』という検診の旅日記を発刊。増版を重ねベストセラーとなり2年後には映画化される。</p>
1939	<ul style="list-style-type: none"> ・5月、北海道の文雄の両親が鹿児島島の官舎に合流する。父は涙腺癌を患い、母はリュウマチが出ていた。 <p>父は美術学校の第1回卒業生で何百枚という絵画があり、個展を開き、その売</p>	

	<p>上金を病友のために「父の家」に寄付する。</p> <p>・6月14日、富美子に、長男・真が産まれる</p>	
1940	<p>・義父・竹治郎が癌で死去</p>	
1942	<p>・春浅い日、夫・文雄が高熱を出す。開放性の肺結核と判る。その後重い症状が出て療養する。厚生省に辞職願を出すが、園長を延長のまま療養を続けて下さいと言われる。</p>	<p>・太平洋戦争開戦</p>
1943	<p>・富美子、実家の四国に所用があつて帰る。そして密かに長島愛生園の光田先生、青松園の野島先生を迎えて文雄の近況を報告し、善処の方法をお願いする。意見を求められるままに、「食事情が困ること、文雄の気性で働くなど言っても働くので職員も園長を差し置いて園務も進行出来まいと思います。瀬戸内海に浮かぶ小さい島にある青松園であれば実家からあまり遠くないので実家も援助してくれます。私も戦時下の女医としてそこで御奉公させていただきます」と心の内を述べる。</p>	<p>・小川正子、郷里の山梨県春日居村にて結核で死去</p>
1944	<p>・3月、鹿児島県鹿屋市の星塚敬愛園を辞し、香川県高松市庵治町の「国立療養所大島青松園」に勤務。文雄は平医官となる。富美子は内科と耳鼻科を担当する。</p>	
1945		<p>・8月15日、太平洋戦争が終結</p>
1947	<p>7月、夫・文雄が結核で死去</p>	
1948	<p>富美子、プロテスタントからカトリックに改宗する(その理由は省略。説明が長くなるのと信者以外には理解しにくいと思われるため)</p>	

1951 (昭和 26 年)	静岡県御殿場市の「私立癩院復生病院」 (＊7) に勤務。	
1953		「らい予防法」を制定 光田健輔主導とされる
1964		恩師・光田健輔死去。
1971 (昭和 46 年)	静岡県御殿場市特別養護老人ホーム 「十字の園」の医師となる	
1973	日本女子医会より、『吉岡弥生賞』を受 ける	
1975	・母・えん没 ・この頃から韓国救癩活動を開始	
1978	林文雄句集『天の墓標』発刊	
1980	叙勲（勲五等瑞宝章）	
1981	富美子 74 歳、回想録『野に咲くペロニ カ』を発刊	
1982	韓国救癩賞受賞（韓国より）	
1984	看護絵日記『夕暮れになっても光があ る』を発刊	
1985	エイボン教育賞を受賞（『夕暮れになっ ても光がある』）	
1986（昭和 61 年）	・昭和六十年度朝日社会福祉賞を受賞 ・丸亀高校生徒会誌「SPIRIT」に『林富 美子先生の築かれたもの』を掲載	
1996		日本ではようやく「らい予防法」が廃 止され、やっと強制隔離政策が廃止 された。
2007	林富美子、死去	
2008		・7月「ハンセン病問題の解決の促進 に関する法律」を制定

2009 (平成 21 年)		「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」が 4 月に施行される。(＊8)
2019		・11 月 15 日に、議員立法により「ハンセン病元患者家族に対する補償金の支給等に関する法律（令和元年法律第 55 号。以下「法」という。）」が成立し、同年 11 月 22 日に公布され、6 月 22 日に施行された。この日を「らい予防による被害者の名誉回復及び追悼の日」と定める
2024 (令和 6 年)		令和 6 年(2024 年) 6 月 12 日に、議員立法により「ハンセン病元患者家族に対する補償金の支給等に関する法律の一部を改正する法律」が成立し、同年 6 月 19 日に公布。6 月 22 日に施行され、補償金の請求期限が令和 11 年(2029 年)11 月 21 日まで延長された。 精神的苦痛を被った元患者の親族にも 130 万円または 180 万円の「補償金」を支払うという救済が厚生労働省により行われている。

＊6. 結婚に至る経緯（に関する富美子の記述の抜粋）

1936 年の 2 月半ば、愛生園の光田園長より、「実は東京で所長会議があった。その後林文雄君の結婚のことをみなで話し合った。三十六歳にもなって未婚というのは敬愛園園長の職務上さしさわりがある。小川正子女子他、何人かの候補者があったが、僕は君が一番良いと思ったからおすすめる」と話が出た。私も二十九歳になって適齢期も終わったかと思った矢先のあわただしい結婚話であった。私は毅然とした考えを持っていたので、率直にお断りした。理由は書面にして「大西の実家は子沢山で、弟だけでも四人もいることと、1927 年倒産の憂きめに会い、弟たちの学費に父が困っていること、私は第三番目の弟、基四夫を東北大学医学部に進学させていること、またその上、私が癩院に来たという理由で、私の学費を出してくれた赤松の叔父の怒りを受け、出してくれた全額と利子の合計金額をただ今支払い中であり、まだ残りのあること等々、今私が結婚すると、弟は学問を中止しなくてはならぬ、どうか先生のもとで何時までも働かせてくださいと、涙ながらに連綿」と書きつづった。ところがある日、先生から

呼び出しがあり、「実は昨日、君の実家を訪問した」と。先生が四国の琴平在の役場に行ったが、父は善通寺に出かけて不在であった。収入役の渋谷老人に、「君の家のことは充分に聞かせてもらった。三百年余りも経た、庭松を見ただけでも十分旧家であることはよくわかった」そのうちにお父さんが帰って来られたので、隣の君の家を訪問し、父上にこの話を持ちかけた。「君は大嘘つきだぞ」と大笑いされて、「何も君が心配することなどないではないか、お父さんは東大を出た長男幸雄がいます。彼が何もかも立派にやってくれています。この上もないよいお話、是非ともよろしくお願ひしたいと申されたよ」とおっしゃるのです。私はただ呆然としてしまった。父はメンツでそう答えたのであろう。私を嫁がせたいという父の情もよくわかったが、それでも納まらない。私は最後の切り札を出した。私も、その時の自分がどうしてこのように猛り狂ったのか分からない。

私は心を静めて、先生の顔を見つめた。「私を一寸東京にやらせてください。全生病院の西原先生に御相談があります」と。先生の顔が見る見るうちに変わって、激しい緊張が肉をこわばらせた。「その事だったらもう解決している。全生園の林芳信君が全部取り計らった」と。私は「それでも私が納得出来ますように、それに兄達にも話さなければなりませんのでお暇を下さい」と。禅問答のような言葉を交わせたまま園長室を引きさがり、そして急遽上京の準備をした。

人づてに聞いた話によると、林文雄先生が全生園に来て間もない日、1人の看護婦Sとの間に縁談が持ち上がった。しかし、当の光田園長はもとより、札幌の父上から猛反対があつて、二人は父上の許しを待っていた。林が三十六歳になり、敬愛園園長を拝命した暁にも、この話は解決しなかった。一番心を痛めたのは林の父であった。たくさんの縁談を次々に、文雄に言わせると着物の反物のように、写真と共に送って来たという。「相手のSの気持ちはどうであろうか」。この話を聞いて知っている私が、これを無視して結婚することがあろうか。そのことを、Sとは格別親しい西原先生に聞きたいと思った。恐らく林文雄も、現在の時点では承知の上で、光田先生が一切を取り運んでいるのであろう。私が我意を通して純粋に固辞すると言う事は、一体どういうことなのか。私自身彼を、信仰においても仕事においても尊敬している。もし結婚という事が私にあり得る場合には、この人より外にいないであろうと思っていた。私には幸せ過ぎると思えた。

全生園の西原女医の官舎で、先生は静かに「素直に受けなさい。それしかありませよ」とおっしゃった。元来言葉少ない先生であったが、この時は一層少ないように思われた。

もう凡ては終わっているのである。私の結婚は、誰も考える余地のない、あまりにも歴然とした事実であった。主が備え給うものである。

光田先生は再び瀬戸内海を渡って私の実家を訪れ、結納を交わした。私のただ一度の親孝行だった。

筆者の想像だが「林文雄とS看護婦の心情を想像するしかないが、文雄は父親の猛反対が今後も変わることが無い状況下でS看護婦との結婚を諦めざるを得ないことを認識し、敬愛園の園長業務を補佐してくれる妻がいなければ園長が務まらないことも判っているので、S看護婦

とも話し合った上で別れたのであろう。そして文雄は光田園長に打診され、光田園長の推薦する女性の中で、「富美子ならば結婚したい」と光田園長にあらかじめ伝えていたのであろう。文雄が富美子には好意を持っていたことは間違いがないと思われるし、また富美子が文雄に好意を持っていたことは光田園長以下の周囲の人々にも分かっていたのであろう。西原先生もそれを見抜いていたし、富美子の心情も理解していたので彼女の背中を押したのであろう。

現在の国立療養所長島愛生園



現在の国立療養所大島青松園



*7. 復生病院

日本救癩運動の草分けである。公立の癩病院が出来ると二十二年前に、フランス人の神父が戦況の途路、出会った病舎をみるにみかねて、上司の許可を得て建てたのがこの病院である。これが刺激になって、外人の手に任せてそしらぬ顔をするわけにはゆかぬという世論を起こしたのが、渋沢栄一氏や光田健輔先生であった。日本の癩問題が、急流のような勢いで、今日の輝かしい癩事情となったことを、野島園長は充分理解されておられるし、また、終戦後の病院管理上の法律も百も承知であられたが、先生は「君の趣旨はよく分かるが、僕は私立病院の給料の問題で、君達一家を不安定な経済状況のなかに手放せない。強いてと言うな

らば、君を同じ村に出来た駿河国立病院に転任させ、そこから復生病院を助けるように計らってみる」と運動し厚生省の方でも OK が出たが、復生病院ドロレス院長は承知しない。専任の医師を求めていると引かない。この折衷案は立ち消えになった。一方青松園の患者側でも再三の留任運動が起こり、病友達の暖かい言葉を受けたが、外国人宣教師に任せて、このまま復生院を打ち捨てておくことが出来ない、それに私的な理由として、二人の子供を教育するために陸続きの歩いて行ける学校にやりたいと説明し、復生院行きを病友達に了解してもらった。

復生記念館



*8. ハンセン病療養所入所者等に対する補償金の支給等に関する法律

「らい予防法」を中心とする国の隔離政策により、ハンセン病患者であった者等が地域社会において平穏に生活することを妨げられ、身体及び財産に係る被害その他社会生活全般にわたる人権上の制限、差別等を受けたことについて、平成 13 年 6 月（2001 年）、我々は悔悟と反省の念を込めて深刻に受け止め、深くお詫びするとともに、「ハンセン病療養所入所者等に対する補償金の支給等に関する法律」を制定し、その精神的苦痛の慰謝並びに名誉の回復及び福祉の増進を図り、あわせて、死没者に対する追悼の意を表することとした。

4. さいごに

富美子が著書『野に咲くベロニカ』の巻頭に「現在の日本ではもうハンセン病に罹患することはきわめて稀なことで、特に少年期の発病はここ十年近く前からゼロとなった。このような陰には、日本近代の救癩事業という不滅の輝かしい歴史が隠されていることを忘れることが出来ない」と高らかに掲げている。しかし富美子の後年、富美子が尊敬していた光田健輔が、生前は「救癩の父」と崇められ、文化勲章やダミアン・ダットソン賞を受けたが、その一方で、患者の絶対隔離政策を推進する「らい予防法」改正、無癩県運動や「らい予防法」制定の中心人物であった。そして日本の対ハンセン病対策の明暗を象徴する人物だと見な

されだしてからは一体どのような思いであったのだろうかと思うが、富美子の自負はいささかも揺るがなかったのであろう。

日本政府のハンセン病対策が法的な社会制度としても、医療制度としても、患者の隔離を通して社会を守るという社会防衛に主力がおかれ、病者の人権が軽視されてきたとみなされるようになり、1996年になってやっと「らい予防法」が廃止されて、強制隔離政策が廃止された。

しかし救癩事業に明暗があったにせよ、富美子が言うように、ハンセン病をほとんど抑えられた陰には「日本近代の救癩事業という不滅の輝かしい歴史が隠されている」ということは紛れもない事実だし、関わった人たちの功績は後世にも評価されるべきである。そして我々は救癩事業に理想に燃え献身的に係わった人たちがいたことを決して忘れてはならないであろう。その一人に林富美子がいたことも。

追.林富美子さんの救癩事業にかける熱情と心情、患者との心温まる交流をほとんどお伝え出来ていないことをお詫びすると共にその生き様をもっと知って頂きたいと思うので『野に咲くベロニカ』をご覧になることをお勧めいたします。図書館にてご覧になれます。私も千葉市中央図書館でお借りしました。

参考資料

- ・ 林富美子著；『野に咲くベロニカ』
- ・ 小川正子著「小島の春 ある女医の手記」（1981年版）
- ・ 池田光穂著；「小島の春」断章
- ・ 丸亀高校生徒会誌『SPIRIT』の『林富美子先生の築かれたもの』
 - ・ 後輩の皆さんへ
 - ・ 『野に咲くベロニカ』より
- ・ エクスペディア

以上